

探究と仮説形成の諸特性

——C.S.パースの議論をめぐって——

地域社会環境学専攻

村 中 達 矢

C. S. Peirce's Argument on the Inquiry and Features of Logical Abduction

MURANAKA Tatsuya

Abstract

In this paper, the relation between inquiry and abduction and the features of abduction are investigated. Abduction is one kind of reasoning or inference which was first formulated by Aristotle in ancient time, and later, investigated by an American philosopher, Charles Sanders Peirce in the 19th and 20th centuries. Peirce dealt with abduction in his many works, such as "The First Rule of Logic" (1898), "On the Logic of Drawing History from Ancient Documents, Especially from Testimonies" (1901), "The Nature of Meaning" (1903), "Pragmatism as the Logic of Abduction" (1903), and "A Neglected Argument for the Reality of God" (1908). According to Peirce, abduction is the process of forming an explanatory hypothesis, and the only logical operation which introduces any new idea, and differs from either deduction or induction. In this paper, various conceptions related to abduction are elucidated which include the notion of the logic of abduction, and another notion about the relation between a percept, perceptual judgment, and abduction.

Key Words

Abduction, Hypothesis Formation, C. S. Peirce

1. 序 論

推論の一種である仮説形成 (abduction) は、最初アリストテレスによって定式化され、のちにC. S.パース (Charles S. Peirce, 1839-1914) によって本格的な研究が行なわれた (cf. Liska 1996, p. 164)。そのパースによれば、仮説形成は説明的仮説を形成する (forming) 過程である (cf. EP 2 : 216)¹⁾。この推論の原語である abduction が仮説形成と訳されることが多いのは、パースによるこの説明のためだと思われる。この説明は1903年のある講演の中でなされているが、その2年前の彼の手稿「古文書から、特に証言から歴史を導き出す

ための論理について」(1901) (以下、「古文書…」) では、仮説形成は我々の予想に反する事実を説明する仮説を採用する (adopt) 過程であるとみなされている (cf. EP 2 : 94-95)。これは、パースがこの手稿で仮説形成のことを「可能性としては無数にありうる諸仮説の中から一つの仮説を選択する過程」とみなした上で、この推論を分析し解釈しているためだと思われる。そのために、この手稿では仮説の構成要素である辞項 (term) がいかに発生し、それらがいかに結合されるのか、という問いが棚上げにされている。それに対し、その2年後の講演「意味の本性」(1903) (以下、「意味…」) と「仮説形成の論理としてのプラグマテ

イズム」(1903)(以下、「仮説形成…」)では、やはりパースは仮説形成のことをそのような仮説採用の過程とみなしてもいるが(cf. EP 2:231)、それと同時に新たに発生してくる仮説の主語と述語に分け入って仮説形成を論じてもいる。この仮説形成という推論のことを、パースは假定(hypothesis)、遡及(retroduction)そして推測(presumption)とも呼んでいた(cf. Kapitan 1997, p.493n.1)。また、パースによると、仮説形成的な思いつきは閃光のように我々の心に浮かぶものであり、仮説形成は可謬的な洞察の作用であるという(cf. EP 2:227)。

Liszka は次のような仮説形成の具体例を示してくれている。

「ケプラーの時代には、惑星は円を描いて地球の周りを回っている、と主要な理論は言っていた。このことはコペルニクスが出して、その後ガリレオが採用した太陽中心仮説が採用されるまで変わらなかった。ケプラーが直面した難問は、ティコ・ブラーエの観察により記録された惑星の(例えば火星の)位置の観察記録がその太陽中心の円形軌道仮説と一致しない、ということだった。しかしついに、多くの間違った段階を経て、彼は新たな仮説を提示するという奇抜な段階を実行した。その仮説とは、惑星は太陽のまわりを円ではなくて楕円を描いて回っている、というものである。そして、そうすることによって彼は仮説を観察記録が示していることに合わせたのである。」(Liszka 1996, p.65)

パースによれば、新たな考えを生じるあらゆる過程は仮説形成過程に含まれるということであるから、その通りであるとすれば、この例のような科学的発見は仮説形成の例であると言える。ただ、我々は新たな考えを生じているときに常に科学的発見をしているわけではないから、科学的発見は仮説形成の一事例であると思われる。

このような仮説形成に関する研究課題を、伊藤

は次の三つに種類分けしている(cf. 伊藤1985, p.196)。

(1-1) 直観的・本能的に見える仮説の形成作用の特性について、さらに掘り下げて考察すること

(1-2) 仮説の形成において、暗黙の形ではあるが、実際に働いていると考えられる、選択の基準を提示して、そのような諸基準を一つの大系にまとめ上げること

(1-3) このようなアブダクションの論理が、過去の科学史の中で典型的にうかがわれる実例を挙げて、これを検証すること

この(1-2)の研究によって提示されているものが、いわゆる仮説形成の論理である。なおここで言う論理というのは、「古文書…」の文脈から考えると、「推論をより正しく自己制御する方法」ぐらいの意味であると考えられる。(1-2)で提示された仮説形成の論理が(1-3)で検証されるとき、ではそれ以外にこれら三つの研究課題はどういう関係にあるのであろうか。(1-2)の研究で提示される仕方でありより正しく自己制御されるというのは仮説形成の一特性であるから、(1-2)は(1-1)の研究の一部であるとも言える。また(1-1)の研究成果次第で(1-2)で研究される仮説形成の自己制御法にかんする考えも変わってくると思われる。

この仮説形成の論理によって我々は不明確で無意味な仮説を排除することができる、とパースは考えていた(cf. EP 2:241)。彼によると、仮説形成の論理には次の二つの働きがある(cf. EP 2:239; Turrissi 1990, p.493)。

(2-1) 本質的に明確な仮説と本質的に不明確な仮説を迅速に見分け、不明確な仮説を排除する

(2-2) 本質的に明確だが多かれ少なかれ難解な仮説を判明な仮説に言い換えるのを助ける

このような働きをすると期待される仮説形成の

論理に関する仮説をより経験的に妥当で論理的にも適切なものにするために、まず、仮説形成が備えていると言われているさまざまな特性を概観し、次に、1903年時点でのパースによる仮説形成の性格づけに関する議論を概念整理、ないしは再構成することが本論文の目的である。

2. 仮説形成のさまざまな特性の概観

2.1 演繹と帰納のどちらとも異なるという特性

Kapitanによると、パースが最初に推論を演繹、帰納、そして仮説形成の三つに種類分けしようと思ったのは、三段論法の形式として、演繹と帰納以外にもう一種類の推論があるはずであるということによるという(cf. Kapitan 1997, pp.480, 495n.9)。だが、そのことに加えて、パースは1903年の講演でも三種の推論それぞれに対して異なるものとしての性格づけを行なっている。その性格づけを整理すると、次のようになる(cf. EP 2 : 216)。

まず演繹は、

(3-1) 理論的な仮説の必然的帰結を導き出すに過ぎない

(3-2) 何かがそうであるに違いないということを証明する

帰納は、

(4-1) 値を確定することしかない

(4-2) 何かが現実^に作用しているということを示す

そして仮説形成は、

(5-1) 説明的仮説を形成する過程である

(5-2) 任意の新たな考えを持ち出す唯一の論理的作業である

(5-3) 何かがそうであるかもしれないということ^をを思い付かせるにすぎない

2.2 探究の第一段階に特有の推論であるという特性

次に、仮説形成は探究の第一段階に特有の推論であるという特性を持つ。ここで言う探究とは、パースによれば、「疑念が刺激となって生じる、信念に到達しようとする努力」のことである(cf. EP 1 : 114)。そしてさらに、この探究は次にみる三つの段階の系列から成るとされる。パースが唱えた可謬主義の考えからすると、真理に関する仮説はいずれ棄却されることを運命づけられていると考えられる為に、探究はある第三段階で終わることはなく、何らかの理由で探究がやめられるまで、第一、第二、第三、第一、第二…と段階が進められるのである。パースによれば、その三つの段階とは、こうである(cf. EP 2 : 440-42)。

第一段階

我々の予想の習慣に割って入った事実を観察することから始まって、その事実を説明する仮説を形成するに至る過程

第二段階

演繹によってその仮説の諸帰結を集める過程

第三段階

それらの帰結を経験的データに照らし合わせることによって元の仮説がどの程度正しいのかを評価する過程

このように探究が三段階の系列から成り、仮説形成がその第一段階に特有の推論であるということが本当だとすれば、仮説形成が自己制御可能であることは明らかである。なぜなら、我々は探究の第二段階に進む前に、意識的にそれまで考えていたものとは別の仮説を選ぶことができるし、さらには、探究の第三段階まで進んだあとで、何らかの理由で、例えばその仮説の検証に資金がかかりすぎることが判ったという理由で、もう一度第一段階まで引き返し、そこで意識的に別の仮説を採用することができるが、意識的にそうするのならば、そうすることを自己制御することができるのも明らかだからである。この自己制御可能である

という仮説形成の特性は、あとでみる仮説形成の論理の存在証明で用いられ、さらに知覚の中から仮説が発生してくる過程の各部に関する説明の中で、その過程の中のある部分の目印としても用いられる。

また、この探究の構造から、理論と経験を結び付けているのは探究の第一段階と第三段階であるということがわかる。これらのうち、第三段階の方では、第一段階で採用された仮説がどの程度正しいか、完全に間違いであるかなどが判るだけである。さらに、第三段階で用いられる経験的データは常に部分的なものでしかありえない。したがって、仮説をより経験適合的なものにする作業は第一段階の方で行なわれてきたと考えられる。つまり、科学史上に多くみられる（より）真なる理論はこの第一段階で習得されてきたと考えられる。だとすると、第一段階に特有の推論である仮説形成の論理は、経験科学において真理を求める方法でもあると見定められる。

2.3 論理が存在するという特性

2.3.1 仮説形成の論理の存在証明

仮説形成（前提の設置）の作業のかなりの部分は感情、気分、感性、あるいは情緒などと呼ばれているものに基づいて行なわれている。だが、たとえそうだとした場合でも仮説形成の論理が存在する、ということを証明するためには、次の三つを証明する必要がある。

- (6-1) 仮説形成は自己制御可能であること
- (6-2) 仮説形成を自己制御する方法が存在すること
- (6-3) その方法の中にはより正しいもの（その方法で我々の仮説形成を自己制御すれば、少なくとも大多数の場合にうまくいくというもの）が存在すること

仮説形成が自己制御可能であることは先にみた通りである。次に、仮説形成を自己制御する方法

が存在することを示すには、一つでもその方法があることを示すことができればそれでよい。たとえば、ある科学者が、閃いた仮説、心理学で「アハ体験」と呼ばれているものを伴って考えついた仮説をいつも意識的に前提として設置している場合について考えてみよう。このとき、その科学者は「そのように考えついたものである」という基準で、意識的に、仮説を検証する前に採用しているのである。これは、他の言い方をすると、その研究者はそういう方法で自分が行なう仮説形成を自己制御しているということである。したがって、仮説形成を自己制御する方法は存在すると言える。

最後に、仮説形成を自己制御する方法の中により正しいものが存在することの証明であるが、そのための正攻法は、過去の科学史上の事実や、正しいと思われる方法を実際に経験科学に適用した結果といった経験的データと照らし合わせることによって、その方法によりどの程度うまく仮説形成を自己制御することができるのかを検証することだと思われる。だが、現在のところまだそのような検証作業は行なわれていないようである。ただ、例えば、我々が「20の問いのゲーム」と呼ばれているものをするときに、パースが示している方法でそのゲームの答える側が推測を行なえば、その答える側はより正しく推測を行なうことができる、という検証結果などは実際にそのゲームをしてみればすぐに得られる（cf. EP2:109,110）。

パースは、そのような検証にはならないにしても、仮説形成の論理が存在しないとすればおかしいことをいくつか示している。それは、第一に、我々が研究者たちに「なぜあなたはあれこれ的はずれな理論を試みないのか」とたずねたら、彼らは「それは合理的だとは思われない」と返答する。そして、ここで合理的ではないという判断は、明らかに価値判断である。価値判断であるならば、そう判断する理由は、その場かぎりの理由ではなく、基準であるはずである。したがって、仮説形成の過程で行なわれる仮説選択の基準が存在するはずである、ということ（cf. EP2:218; 伊藤 1985, pp.194-96）。第二に、背理法の演繹が行な

われるときには、特定の方法で前提が設置されている。もしその方法が存在しなかったとしたら、これまで背理法の演繹は行なわれえなかったはずである (cf. EP 2 : 235), ということである。以上より、仮説形成の論理が存在するということが、非常に尤らしく思われる。

2.3.2 仮説形成の論理の概観

パースは手稿「古文書…」の中の仮説形成の論理を説明している箇所で、仮説形成をするときに考慮されるべき10個ほどの事柄を一つ一つ説明し、その説明の合間で何度か、それらの事柄は比較検討されなければならない、と述べている (cf. EP 2 : 106-11)。したがって、そこで示されている仮説形成の論理は、全体としてみれば、「これこれの事柄を比較検討せよ」という形式を持っているとみなすことができる。またパースはそれらの事柄のことを評価するべき仮説の諸性質、仮説の価値の全要素、そして仮説の経験的特徴と呼んでもいる (cf. EP 2 : 106-13)。パースによるとそれらの事柄は次の三つに大別される (cf. EP 2 : 107)。

- (7-1) 仮説が検証可能であること
- (7-2) 仮説が関連する全ての事実を説明すること
- (7-3) 研究の経済性

(「研究の経済性」関連のパースのテキストは Kapitan 1997, p. 484に列挙されている。) ここで経済性というのは、パースによれば時間、労力、予算などの面で損失の少なさを意味している (cf. NEM 2 : 37-38)。しかし、この研究の経済性を考慮すれば、「仮説の自然さを考慮することによって得られるより正しい仮説」、「適用範囲の広い仮説を採用することによって得られる『その仮説によっては説明できない事実』に関する新たな知識」そして「錯綜していない仮説と経験的データの間の誤差に関する知識」などの利益を多くすることもできる。またその10個ほどの事柄が「仮説

の経験的特徴」であるというのは、これらが「仮説を経験適合的なものにするにあたって評価するべき仮説の特徴」である、という意味だと考えられる。そしてこれらの中身を見ると、それが「経験適合的な仮説」と「のちに我々が別の仮説を経験適合的にするのに役立つ仮説」の両方の特徴を含んでいる (それらの具体的な中身に関しては村中 (2004) 参照)。これらの仮説はそれぞれ「より正しいと考えられる仮説」と作業仮説と呼ぶことができる。このように、この仮説形成の論理は、それ自体は正しくない作業仮説を手段として利用することによってより正しいと思われる新たな仮説を意識的に習得する方法である。

他の言い方をすると、そのようにそれらの事柄が作業仮説の特徴を含むことによって、この仮説形成の論理には消去法や背理法の考え方が取り入れられていると思われる。つまり、「ある考えが誤りであることが明らかになること」を経由することによってより正しい新たな考えを習得できる場合が多いことは、かねてから消去法や背理法が行なわれるときに経験されてきたことであるが、この仮説形成の論理もそのことを利用している、ということである。探究の第一段階に位置する仮説形成の論理の場合、それは「探究の第一段階で意識的に採用された仮説がその後、第三段階で棄却されること (またはどの程度誤りであるかが判明すること) を新たな知識の習得に利用する」という形をとる。つまりこれは、仮説に補助線のような働きをさせたり、それに反面教師をやらせるということだといえる。パース自身は手稿「古文書…」で「一度取り上げた仮説が全く擁護できないということが明らかになる前にそれを捨てるという営みほど無駄の多いことはない。」(EP 2 : 113) と述べている。

さらに、この仮説形成の論理は、それ自体が予め判断つまり先入観でありながら、先入観が原因で我々が判断を誤らないためのものである、という性格を持つ。我々が先入観のために判断を誤ることが多いことを認めた上で、我々が別の予め判断により判断を誤ることを少なくすることが

できる、とみなしているという点で、この論理は人間の理性への不信と信頼の両方に基づいていると言える。この仮説形成の論理全体のその他の特徴としては、多くの種類の「仮説の簡索性」を評価すべきものとして取り入れていること、科学的説明や「演繹の種類分け」にかんするパースの考えが組み込まれていることなどを挙げるができる。

また、この仮説形成の論理には不備な点がいくつかみられる。第一に、比較検討されるべき10個ほどの事柄には、どの場合にも検討されるべき事柄と特定の場合にのみ検討されるべき事柄が混ざっており、そして、この仮説形成の論理が「これこれの事柄を比較検討せよ」という形式にされているために、特定の場合にのみ検討されるべき数々の事柄がそれぞれどういう場合に検討されるべきなのか、という問いが棚上げにされている。そしてその結果、それらの事柄がどういう場合に検討されるべきなのかが確定されていない。第二に、まず、探究の第一段階には次の二つの場合があると思われる。

場合Ⅰ 何らかの基準が参照されつつ一つの仮説が形成され、その仮説が採用されて第二段階に進む場合

場合Ⅱ 何らかの基準が参照されつつ仮説が形成されるという作業が二度以上行なわれ、二つ以上の仮説が念頭に置かれて、次に何らかの基準が参照されてそれらの仮説の中から一つの仮説が選択され、採用されて第二段階に進む場合

このとき、比較検討されるべき10個ほどの事柄が、それぞれ「個々の仮説が形成される過程で参照される基準」なのか、それとも「念頭に浮かんだ複数の仮説の中から仮説選択がなされるとき基準」なのか、それとも両方のときの基準なのか明確ではない。

2.4 仮説形成の推論形式

(7-2) で示されているように仮説が事実を

説明するものでなければならない、ということに基づいて、パースは講演「仮説形成…」の中で次のように仮説形成の推論形式を示している。

「驚くべき事実Cが観察される

だが、もしAが真ならばCは当然のことになるだろう

したがって、Aは真ではないかと考える根拠がある」(EP2:231)

(パースは「驚くべき (surprising)」という用語で「探究者のある予想を裏切るか、その人のある予想の習慣に割って入る」(EP2:440-41)ということの意味している。)これをうけて、Liszkaはそれを次のように分かり易く言い換えている。

「ある驚くべきないしは変則的な観察または出来事Eが起こっている(その出来事に関するある標準的な、またはよく同意された仮説H1の観点からみるとその出来事は驚くべきである。ないしは変則的である)

この出来事は別の仮説H2からすれば驚くべきことではないだろう(つまり、EはH2から導き出されるだろう)

したがって、H2は本当であると考えある根拠がある。つまり、H2は納得的(plausible)である(というのもこのH2はEを説明するから)」(Liszka 1996,p.66)

パースは仮説の内容全体が出現する過程だけではなく、その仮説が発生したあとで、それを、検証する前に意識的に採用する過程も仮説形成の過程に含めていた、ということがこれらのどちらの推論形式からも見て取れる。

3. 知覚と仮説形成の関係

3.1 知覚の中から仮説が発生してくる過程の各部の目印

パースは講演「意味…」と「仮説形成…」で、

知覚の中から意味とその解釈、理論の前提、認識、ないしは仮説が発生してくる過程を説き明かそうとしている。つまり、前提が設置される過程はたいがい直観にゆだねられているが、その直観がいかに形成されているかに分け入ってその過程を考究している。そうするために、その過程の各部の目印となるいくつかの性質をパースは見定めているようである。たとえば、彼によれば、「それを否定するとはどういうことかに関する考えを我々は少しも作り出すことができない」という性質は知覚判断と仮説形成（の結論）を区別することができる目印であり、「それが真実であることを疑うことができる、ないしはそのことを否定することすらできる」という性質は、知覚判断ではなく仮説形成（の結論）にはある性質であり、そして自己制御できるという性質は「知覚判断が形成される過程」と推論を区別する特徴であるという（cf. EP 2 : 229, 30, 33）。それらの性質を整理し、列挙すると、次のようになる。

目印Ⅰー１ 命題形式を持たないという性質

目印Ⅰー２ 命題形式を持つという性質

目印Ⅱー１ 個別的なものであるという性質

目印Ⅱー２ 一般的な要素を含んでいるという性質

目印Ⅲー１ それを否定するとはどういうことかに関する考えを我々は少しも作り出すことができない、という性質

目印Ⅲー２ それが真実であることを疑うことができる、ないしはそのことを否定することすらできる、という性質

目印Ⅳー１ 自己制御できない（または決定づけられている）という性質

目印Ⅳー２ 自己制御できる（または決定づけられていない）という性質

なお、ここで目印Ⅰー１から目印Ⅲー２までは、知覚表象、命題の主語と述語、そして命題全体のような表象や概念の性質であり、目印Ⅳー１と２は「知覚判断が形成される過程」や仮説形成過

程のような過程の性質である。また、パースによれば、自己制御には「全く抑制的なものであり、その結果、何も創造しない」という性質がある（cf. EP 2 : 233）。

これらの目印のうち最もわかりにくいものは「個別的なものである」という性質と「一般的な要素を含んでいる」という性質である。パースはアリストテレスによる「一般的なものの」の定義をそのまま踏襲している。そして、そのアリストテレスは、「一般的なものを」「多くのものがそれを属性として持つと述語づけされる、という性質をもともと持っているもの」と定義し、そうでないものは個別的なものである、としている。そしてアリストテレスは一般的なものの例として人間を、そして個別的なものの例としてはカルリアスをそれぞれ挙げている（cf. EP 2 : 208；アリストテレス 1971, pp.91—92）。講演「意味…」と「仮説形成…」の文脈からすると、パースはここの「もの」に命題の主語、述語のような概念だけではなく、知覚表象も含めている。つまり、彼は知覚表象、命題の主語、述語のどれの性質を表わすのにもこの「一般的なもの」と「個別的なもの」という概念を用いているのである。

次にパースの言う「一般的なものの」の具体例をみてみよう。彼によると、「この椅子は黄色いようである。（this chair appears yellow.）」という知覚判断の中の述語「黄色い（yellow）」は一般的であるという。そしてここで一般的であるというのは、この述語はこれまでにみられてきた黄色いもの全てのある種の合成写真を指示している、ということであるという（cf. CP 7. 634）。さらに、あとで「知覚判断と仮説形成の境界に位置する現象」としてもみるが、我々は「シュレーダーの階段」という名で知られている多義的な図を見ると、その図を上から見た階段として見ることもできるし、下から見たそれと見ることもできる。また、タイルや方眼紙などの方眼状のものをみると、我々はその中に一つのマス目、四つのマス目、九つのマス目などからなる正方形があると見ることができる。パースによれば、これらのような錯視図

形などの複数の理解の仕方ないしは見方は一般的である。このとき一般的であるというのは、それらの複数の理解の仕方はどれも、その線を種類分けする一般的な仕方、ないしはその線がそれに包括される一般的な種類である、ということであるという (cf. EP2 : 228)。

先に見た例のようにある人が黄色い椅子を目にして「この椅子は黄色いようである」という知覚判断を半ば無意識に行なったとき、その人は、「特定の複数の主語（またはそれにあたるもの）に対しては、それらに続けて特定の述語をつなげよ」という内容の、その人が発明したわけではない言葉づかいの規則の一つに半ば無意識に従って、その黄色い椅子の知覚表象につづけて黄色いという述語を半ば無意識につなげているのだと思われる。この事態をパースは知覚判断の述語の中に一般的な要素が含まれている、とみなしているのだと思われる。

パースは第一性、第二性、そして第三性という三つのカテゴリーを考案しているが、この一般的なものはその第三性の一事例でもある (cf. Turrisi 1990, p. 481)。しかしこの点についての検討はまたの機会に行ないたい。

3.2 知覚の中から仮説が発生してくる過程の概観

3.2.1 知覚の中から仮説が発生してくる過程にかんするパースの説明のおおまかな整理
講演「意味…」と「仮説形成…」の中でパースが行なっている「知覚の中から仮説が発生してくる過程」についての説明を、おおよそ発生順になるように、おおまかに整理すると、こうなる。

(8-1) 知覚表象 (percept, perceptual image) [または感覚像 (sense-image)] が心に現れる。この知覚表象は個別的なものであり、命題形式を持っていない。

(8-2) 知覚判断が形成される過程が起こる。我々はこの過程を自己制御することはできない。つまり決定づけられている。

(8-3) 知覚判断が意識に現れる。この判断は命題形式を持っている。そしてこの判断の主語は(8-1)の知覚表象（またはそれに相当するもの）であり個別的なものであるが、その述語には一般的な要素が含まれている。

(8-4) 知覚判断と仮説形成がどんなはっきりとした境界線もなく徐々に変化し合う。

(8-5) 仮説形成が行なわれる。この過程の少なくとも一部は自己制御されうる。つまり、決定づけられていない。

(8-6) 仮説形成の結論が意識に現れる。この結論も、命題形式を持っている。多くの場合、この結論は主語と述語の両方に一般的な要素を含んでいる。

この発生順の整理がおおよそのものでしかないので、知覚判断と仮説形成が徐々に変化し合う、というように逆戻りする過程が含まれていること、仮説形成の前提がどのように位置するのかが分からないこと、などによる。なお、我々は通常、(8-1)から(8-3)までをまとめて知覚と呼んでいるのだと思われる。また、通常、知覚表象ではなく知覚判断の方が経験、事実、経験的事実などと呼ばれている。したがって、経験的事実は知覚表象を言葉（またはそれに相当するもの）で表わしたものであると考えられる。つまり、経験的事実には、言葉で表わすという作業が既に一度行われていると言える。次に仮説形成の結論のことが通常、理論の前提、認識などと呼ばれている。そして仮説形成の結論はある種の経験的事実を説明するものである。したがって理論の前提は知覚表象を間接的に言葉で表わしたものであり、それは知覚表象から数えて、言葉で表わすという作業が二重に行われたものであると言える。知覚表象、経験的事実、そして理論の前提の三者は、こういう関係にあると整理することができる。

3.2.2 知覚判断が形成される過程

パースの説明を基にすると、「知覚判断が形成される過程」の特性は、次のように整理すること

ができる (cf. EP 2 : 210, 227, 233)。

(9-1) 自己制御されえない, または批判されえない

(9-2) 十分には意識されない, または半ば無意識に行なわれる

(9-3) 一つの連続した過程の中で行なわれる

3.2.3 知覚判断

パースによる知覚判断の説明を整理すると, 次のようになる (cf. EP2:xxv-xxvi, 208-10, 221, 223, 224, 227, 231, 240; CP5.54, 7.634; Turrisi 1990, p.479)。

(10-1) 命題形式を持つ

(10-2) 現在の知覚表象または感覚像の性質, 特徴を直接的に表わしている。またはその知覚表象を指示している

(10-3) 知覚表象から生じたものである

(10-4) ある知覚判断がある知覚表象を指示しているとき, 別のどの命題も直接的にはその知覚表象に関連していない。別の命題がその知覚表象と関連している場合には, その知覚判断と関連することでそうしている

(10-5) その主語は個別的な辞項 (term) である

(10-6) 全称命題ではありえない

(10-7) その述語の中に一般的な要素を含んでいる。そして思考の一般的な要素はみな, 知覚判断の中で現れる

(10-8) その述語は完全に知覚的なわけではない

(10-9) 概念の出所である。または自己制御されるあらゆる思考, 推論の出発点, 「最初の前提」である

(10-10) そこから必ず全称命題が導き出されうると推測される。例えば, 犬の知覚表象に関する知覚判断から, 「犬はひんぱんに居眠りする」や「犬には居眠りの用意をするときに旋回する傾向がある」という全称命題が導き出される (cf. EP

2 : 223。特称命題から全称命題が導き出される例に関しては EP 2 : 210参照)。

(10-11) 自分が受け入れることを完全に強いられる

(10-12) その内容は意識的に制御されえない

そしてパースは「知覚判断がその述語の中に一般的な要素を含んでいること」, 「知覚判断が知的な発達全ての出発点であること」, そして「我々が, 推論というものをまだ採用していないときに最初に推論のことを知るのは知覚——観念の世界の知覚——によってでしかありえないこと」などから, 我々は一般的なもの, 観念, そして第三性を知覚することができる, としている (cf. EP2 : xxv-xxvi, 223-24, 233)。EP 2 の解説によると, パースが知覚表象と知覚判断を区別したのはパース自身の实在論を保持するためであるという (cf. EP2 : xxv-xxvi)。しかしこのパースの实在論の検討は別の機会に行ないたい。

3.2.4 知覚判断と仮説形成が変化し合う過程

パースによると, 知覚判断と仮説形成は, どんなはっきりとした境界線もなく徐々に変化し合う, という (cf. EP2 : 224, 227; Turrisi 1990, p.480)。しかし, ここでパースの言う「知覚判断」が「知覚判断が形成される過程」と「命題形式を持つ知覚判断」のどちらを指しているのか, あるいは両方を指しているのか, あとに見る具体例と合わせて考えても不明確である。同様に, ここで言う「仮説形成」が仮説形成過程を指しているのか, 仮説形成の結論を指しているのか, それとも両方を指しているのかも不明確である。今後, これらの点が明確にされる必要があると思われる。

またパースは「仮説形成が, どんなはっきりとした境界線もなく知覚判断へと徐々に変化する」ことを, 「我々の最初の前提, つまり知覚判断は仮説形成の極限的な事例であるとみなすことができる。全く批判できない, という点で知覚判断は仮説形成と異なる」と言い直している (cf. EP2 : 227, 229; Turrisi 1990, p.480)。しかし, もし知

覚判断と仮説形成は異なる、と考えるのならば、知覚判断のことを仮説形成の事例とみなすことはできないはずである。そしてまた、もし知覚判断のことを仮説形成の事例だとみなすのならば、知覚判断と仮説形成の違いは、正確には知覚判断と「知覚判断以外の仮説形成」の違いと呼ばなければならない。

パースは「仮説形成と知覚を結び付けているもの」として先にみた「シュレーダーの階段」という名で知られている多義的な図などの理解の仕方を挙げている (cf. EP2: 228)。先にみたタイルの見え方の例についても言えることだが、どの理解の仕方をしているときにも、目にして心に現れている知覚表象は同じである。したがって、異なるのはそれぞれの理解の仕方に対応する判断の、主語ではなくて述語またはそれにあたるものであると思われる。パースはこれらの錯視などの現象をみると「図形にかんする特定の理解の仕方が知覚の中で生じているようにみえること」と「自己制御できない過程からそれができる過程への変化がみられること」から、これらの現象は仮説形成と知覚を結びつけているものだ、としている。確かに、これら二つの性質から、これらの現象は知覚判断と仮説形成の境界に、または両方にまたがって位置していると思われる。ただ、多くの仮説形成の結論にみられる全称命題やそれにあたるものは、これらの錯視現象などの中には見当らない。

4. 結論

もし以上に見たパースの議論の中の不備な点が正されれば、その議論などから、結論として、仮説形成の論理の働きと仮説形成作業の位置づけについて、行為とのかかわりで、おおよそ次のようなことが言える。

まず、パースは講演「仮説形成…」の末尾で、心の制御されず批判されない部分に論理的活力が回復するということは意図的な行為 (purposive action) の中で起こる、と述べている (cf. EP2: 241)。この「心の制御されず批判されない部分」

というのは、文脈から考えるとおそらく知覚のことだと思われる。したがって、ここでパースはおおよそ、意図的な行為を起こすことによって我々は知覚に思考の活力を奮い起こすことができる、と言っているのだと思われる。

ところで、どのように意図的な行為を行なうかに関する各場合の考えはそれぞれ新たな考えであり、あらゆる新たな考えは仮説形成の過程で生じるのだとすれば、いかに意図的な行為をするかに関する考えも仮説形成過程で生じるはずである。また不明確で無意味な仮説はいかに意図的な行為をするかに関する考えを混乱させ、その結果、意図的な行為をすることを妨げたり、我々の行為を淀ませたりすると考えられる。したがって、不明確で無意味な仮説を棄却する働きをする「仮説形成の論理」は意図的な行為を行なうことの助けになると期待される。

以上のことを合わせて考えると、仮説形成の論理には、意図的な行為を起こさせることを經由して、心の中に思考の活力を奮い起こすという働きがある、とパースは考えていたのではないかと推察される。

また、以上の議論から、知覚から仮説形成へ至る過程は連続しており、仮説形成の過程で生じた考えに従って意図的な行為が行なわれ、その意図的な行為によって新たな知覚が生じ、その知覚と仮説形成の過程は連続している、…という過程の系列の中に仮説形成は位置づけられると考えられる。

さらに、以上のことと理論の前提も仮説形成の過程の中で生じてくることを合わせて考えると、意図的な行為が行なわれて新たな知覚が生じ、その知覚の中から理論の前提が生じてくる、というように、理論の前提は意図的な行為をする中で生じるのではないかと予想される。

今後の課題としては、仮説形成作業に特にみられる性格をさらに分析、解釈し、その成果に基づいて、パースが仮説として提示した仮説形成の論理に改良を加えることが挙げられる。

注

1) 以下では、パースのテキストの引用元や参照先を、次のように表記することにする。

Peirce, C. S. (1976) *The New Elements of Mathematics by Charles S. Peirce*, vol. 1—4, Carolyn Eisele, ed., The Hague [略号 NEM. 巻数とページ数により, NEM 1 : 10 のように記す。]

—— (1980) *The Collected Papers of Charles S. Peirce*, 8 vols. Vols. 1—6, edited by Charles Hartshorne and Paul Weiss; vols. 7—8, edited by Arthur Burks. Cambridge: Harvard University Press. [略号 CP. 巻数とページ数により, CP 1 : 10 のように記す。]

—— (1992—98) *The Essential Peirce*, ed. N. Houser, and C. Kloesel (vol 1) and the Peirce Edition Project (vol 2), Bloomington, IN: Indiana University Press, 2 vols. [略号 EP. 巻数とページ数により, EP 1 : 10 のように記す。]

村中達矢 (2004) 「C.S. パースが提示した「仮説の構成原理」について」『中部哲学会年報』第36号, 中部哲学会

参考文献

- Fann, K.T. (1970) *Peirce's Theory of Abduction*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Houser, N., D.D. Roberts, and J.V. Evra, eds. (1997) *Studies in the Logic of Charles Sanders Peirce*. Indiana U. P., Bloomington and Indianapolis.
- Kapitan, T. (1997) "Peirce and the Structure of Abductive Inference". In N. Houser et al., eds., 1997
- Liszka, J.J. (1996) *A General Introduction to the Semiotic of Charles Sanders Peirce*. Indiana University Press.
- Peirce, C. S. (1976) *The New Elements of Mathematics by Charles S. Peirce*, vol. 1—4, Carolyn Eisele, ed., The Hague.
- (1980) *The Collected Papers of Charles S. Peirce*, 8 vols. Vols. 1—6, edited by Charles Hartshorne and Paul Weiss; vols. 7—8, edited by Arthur Burks. Cambridge: Harvard University Press.
- (1992) *Reasoning and the Logic of Things: The Cambridge Conferences Lectures of 1898*, edited by Kenneth Laine Ketner, Harvard University Press. (パース『連続性の哲学』岩波文庫, 伊藤邦武訳, 2001)
- (1992—98) *The Essential Peirce*, ed. N. Houser, and C. Kloesel (vol 1) and the Peirce Edition Project (vol 2), Bloomington, IN: Indiana University Press, 2 vols.
- Turrisi, P.A. (1990) "Peirce's Logic of Discovery: Abduction and the Universal Categories" in *Transactions of the Charles S. Peirce Society* 26.
- アリストテレス (1971) 「命題論」『アリストテレス全集 1』岩波書店, 山本光雄訳
- 伊藤邦武 (1985) 『パースのプラグマティズム』勁草書房